

家庭における動物の命と食肉の関連性に関する教育の実態調査

加田日出美*・小松亜侑美**・岩本和晃***・林田まき*・饗庭尚子****

(平成 23 年 5 月 19 日受付/平成 23 年 9 月 13 日受理)

要約: 平成 17 年 6 月、『食育基本法』が制定された。しかしながらその内容は、ほとんどが食事の重要性や栄養バランスなどに重点が置かれており、戦後のわが国の平均寿命を飛躍的に延ばしたとされる、動物性タンパク質とくに食肉に代表される畜産物に関して、それがヒトと同等である動物の命から得られているということを教える食育プログラムはほとんど認められない。

そこで、本研究では子供が他の動物の命をもらって生かされていることを認識し、命に対する感謝の心を持てるようにと考え、家庭における動物の命と畜産物の関連性に関する教育の実態調査を行った。都内の中高生 1,117 人およびその保護者 1,009 人の計 2,126 人にアンケートを行ったところ、生徒は小学校低学年までに肉が動物であることを知り、保護者も教えていることが明らかとなった。肉を生産する動物について、生徒は動物の命を奪って肉が得られるという内容を多く聞き、また保護者も話しており、動物の命と食肉の関係について子供がしっかりと理解する機会を持っていることは判明したが、生徒は肉が動物であることを自然に知った、覚えていないとする回答が多く、家庭で教えられた記憶を持ちにくいことがうかがえた。

キーワード: 食育, 食肉, 命, 家庭教育

はじめに

平成 17 年 6 月、『食育基本法』が制定された¹⁾。これは近年の国民の食生活の環境変化が、栄養の偏りや不規則な食事、生活習慣病を引き起こすに至ったことを受けて、国民に幼少時から食に対する適切な判断力を持たせることにより、生涯にわたって健全な食生活を實現し、心身の健康の増進を図るものと位置づけられている。内閣府が進める食育基本法、食育基本法の規定に基づき設置された食育推進会議において、2006 年 3 月 31 日に決定された食育推進基本計画²⁾の中で見られるのは、朝食の重要性、食品の安全性、生産地、食事バランスやメタボリックシンドロームなどについての内容がほとんどである。食育基本法では、第 3 条において『食に対する感謝の念と理解』として、国民の食生活が自然の恩恵の上に成り立っており、食に関わる人々の様々な活動に支えられていることについて、感謝の念や理解が深まるように配慮されなければならないと述べられているが、食肉に関してはわずかに触れられている程度である。また、食育に関する文献を概観してみても、ほとんどが食事の重要性や栄養バランスなどに重点が置かれており、戦後のわが国の平均寿命を飛躍的に延ばしたとされる、動物性タンパク質とくに食肉に代表される畜産物に関して、それがヒトと同等である動物の命から得られてい

るということを教える食育プログラムは数例にとどまっている^{3,4)}。食肉処理について子供はほとんど教えられることはなく、消費者は日常的にパック詰めされた食肉を目にするのみである。動物の命と食肉の関係について子供達に実感させる教育は、一部の教育機関で試みられているものの、はなはだ限定的な実施にとどまっているのが現状である⁵⁾。

近年、わが国では医療現場における脳死・臓器移植に代表される命の尊厳に関する問題や、いじめによる自殺に代表される自らの命さえも疎かにする問題などが多く議論されており、教育現場でも児童や生徒にすべての命が尊重されるべきものであることを理解させる教育方法が模索されている。子供達に命の大切さを理解させるための一つの試みとして、人間をはじめとしてすべての命はかけがいのないものであるが、人間はその生命を維持するために動植物の命を捕食して生きていかなければならないという事実を認識させることが、生かされている自分を発見すると同時に自身をとりまく様々な生命体に対する畏敬の念を養うとされている⁶⁻⁸⁾。

そこで、本研究では子供が他の動物の命をもらって生かされていることを認識し、命に対する感謝の心を持てるようにと考え、家庭における動物の命と食肉の関連性に関する教育の実態調査を行った。

* 東京農業大学短期大学部生物生産技術学科

** 東京農業大学大学院農学研究科バイオセラピー学専攻

*** 東京農業大学農学部バイオセラピー学科

**** 東京農業大短期大学部非常勤講師, 北里大学大学院医療系研究科臨床医科学群循環器内科学

動物の命と食肉の関係についての 家庭教育に関する調査

家庭の中で動物の命と食肉の関係について、保護者が子供に対して教育を行っているか否かを知るために、中高生およびその保護者を対象にアンケート調査を実施した。対象は、都内の中高生 1,117 人（中学 1 年生 220 人、中学 2 年生 220 人、中学 3 年生 154 人、高校 1 年生 196 人、高校 2 年生 187 人、高校 3 年生 140 人）およびその保護者 1,009 人の計 2,126 人である。アンケートは、中高生の生徒用と保護者用を作成した。生徒用の設問は、1. 学年、2. 動物の好き嫌い、3. 動物が好きまたは嫌いな理由、4. 好きな動物の種類、5. 肉の好き嫌い、6. 好きな肉の種類、7. 週に何回肉を食べるか、8. よく食べる肉の種類、9. 肉用家畜を見た経験の有無、10. 見たことのある肉用家畜、11. 肉用家畜に触れた経験の有無、12. 実際に触れたことがある肉用家畜の種類、13. 肉が動物であると知った時期、14. 肉が動物であると知った情報源、15. 家庭で肉用家畜のことを聞いたことがあるか、16. 肉を生産する動物について聞いた話の 16 項目を設定した。

保護者用の設問は 1. 性別、2. 動物の好き嫌い、3. 動物が好きまたは嫌いな理由、4. 好きな動物の種類、5. 肉の好き嫌い、6. 好きな肉の種類、7. 週に何回肉を食べるか、8. よく食べる肉の種類、9. 肉用家畜を見た経験の有無、10. 見たことのある肉用家畜、11. 肉用家畜に触れた経験の有無、12. 実際に触れたことがある肉用家畜の種類、13. 子供の動物の好き嫌い、14. 子供の好きな動物の種類、15. 子供の肉の好き嫌い、16. 子供の好きな肉の種類、17. 肉を生産する動物を子供に見せたことがあるか、18. 見せたことがある肉用家畜の種類、19. 家庭で肉が動物であることを話したか、20. 肉が動物であることを話した時期、21. 肉を生産する動物について子供に話した内容の 21 項目を設定した。

上記の設問のうち、『動物が好きまたは嫌いな理由』の選択肢には、動物に対するプラスのイメージとして、a. かわいい、b. いやされる、c. たのしい、d. いい匂い、e. きれい、f. その他の選択肢を、マイナスのイメージとして、a. こわい、b. ストレスを感じる、c. うるさい、d. くさい、e. きたない、f. その他の選択肢を設け、それぞれ複数回答とした。『好きな動物の種類』の設問には、家庭で飼育される代表的なコンパニオン・アニマルとして、a. イヌ、b. ネコ、c. ウサギ、d. ハムスター、e. インコ、f. その他の選択肢を設け複数回答とした。

さらに食肉についての家庭教育で重要となる、『肉が動物であると知った時期』（生徒用）および『肉が動物であると話した時期』（保護者用）については、その時期を a. 幼稚園、b. 小学校 1～2 年生、c. 小学校 3～4 年生、d. 小学校 5～6 年生、e. 中学生以上とする選択肢を設け、また、『肉を生産する動物について聞いた話』（生徒用）および『肉を生産する動物について話した内容』（保護者用）については、a. その肉である動物の姿形について、b. その肉である動物が生きて動いていたということについて、c. そ

の肉が動物の命を奪って得られるものだということについて、d. 食肉が健康に生きるために必要であるということについて、e. 聞いたことがない（話したことがない）の選択肢を設けた。

調査結果および考察

肉用家畜、コンパニオン・アニマルを問わず、動物に関心を持つ前提となる『動物の好き嫌い』については、『好き』と答えた生徒は 92%、『嫌い』と答えた生徒が 8%であった。これに対し、保護者は『好き』79%、『嫌い』21%であり、『動物が好き』との答えは、生徒の方が保護者に比べ多い結果となった。さらに生徒の『動物が好きな理由』は、『かわいい』48%、『いやされる』32%、『たのしい』13%、『きれい』4%、『いい匂い』2%、『その他』1%の順であった。『好きな動物の種類』は、『イヌ』27%、『ネコ』21%、『ウサギ』13%、『ハムスター』12%、『インコ』7%、『その他』20%であり、『その他』の回答の中には、ウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリなどの肉用家畜も挙げられていた。

『肉の好き嫌い』については、生徒の 95%、保護者の 85%が『好き』と回答しており、『好きな肉の種類』は、生徒、保護者とも『豚肉』、『鶏肉』、『牛肉』、『羊肉』、『その他』の順に嗜好性が高い結果となった。『週に何回肉料理を食べるか』については、『3 回』、『4 回以上』、『2 回』、『1 回』の順であり、『多く食べる肉の種類』は『好きな肉の種類』と同様の傾向が認められ、育ち盛りの子供を持つ家庭の食生活をうかがわせる結果となった。

動物の好き嫌いが肉の好き嫌いに影響しているか否かを検討したところ、生徒・保護者ともに『動物が嫌い』と答えた回答で『肉が嫌い』とするものが多い結果となった（表 1）。なお、同様に保護者の肉の好き嫌いが子供に影響しているかを検討したが、影響は認められなかった（表 2）。

子供が動物の命と食肉の関係を知る上で重要な要素となる、『肉用家畜を見た経験』（生徒用）『肉用家畜を見せたか』（保護者用）については、72%の生徒が『見た』経験を有し、69%の保護者が『見せた』と答えており、『見たことのある』または『見せたこと』がある肉用家畜は、ウシ、ブタ、ニワトリがほぼ均等に分布した。保護者が子供に『家庭で肉が動物であることを話したか』については、68%の保護者が家庭で子供に『話した』としており、半数以上

表 1 動物と肉の好き嫌いの関係

		(人)	
		肉が好き	肉が嫌い
生徒	動物が好き	548	18
	動物が嫌い	40	11*
保護者	動物が好き	361	50
	動物が嫌い	80	26**

χ^2 検定 * $P < 0.001$, ** $P < 0.01$

表 2 生徒と保護者の肉の好き嫌いの関係

		(人)	
		肉が好き	肉が嫌い
生徒			
保護者	肉が好き	426	16
	肉が嫌い	72	4

の家庭で『肉が動物であること』をきちんと伝えていることが判明した(図1)。

『肉が動物であることが分かった時期』(生徒用)について、生徒の回答は、幼稚園50%、小学校1,2年生35%、小学校3,4年生13%であり、ほとんどの生徒が小学校低学年までに肉が動物であることが分かったという結果であった。なお、この設問に対する生徒の回答は、中学生と高校生で差は認められず、同様の結果を示した。これに対し『肉が動物であると話した時期』(保護者用)は、幼稚園54%、小学校1,2年生31%、小学校3,4年生11%となり。生徒の回答同様、小学校低学年までに親が家庭で肉が動物であると教えていることがうかがえた(図2)。

しかしながら、生徒は『肉が動物であることが分かった情報源』を、『自然に知った』とする回答が49%で最も高く、『覚えていない』19%、『家族』14%との回答であった(図3)。この設問に対する回答も中学生と高校生で差が認められず、同様の傾向を示した。

『肉を生産する動物について聞いた話』(生徒用)について見ると、『その肉が動物の命を奪って得られるものだという事について』が29%、『その肉である動物が生きて動いていたということについて』20%、『その肉である動物の姿形について』17%、『食肉が健康に生きるために必要であるということについて』12%となり、ほとんどの生徒が食肉と動物の関係についての理解の助けとなる話を聞いていたことがうかがえた。しかし一方で、動物と食肉の関係について『聞いたことがない』とする回答も17%認めら

れ、『肉が動物であることが分かった時期』について、『自然に知った』とする回答が多かったことを裏付ける結果となった。一方、保護者は、『肉を生産する動物について子供に話した内容』については、『その肉が動物の命を奪って得られるものだという事について』が33%、『その肉である動物が生きて動いていたということについて』22%、『その肉である動物の姿形について』20%、『食肉が健康に生きるために必要であるということについて』19%と回答しており、子供が『肉を生産する動物について聞いた話』のうちで『その肉が動物の命を奪って得られるものだという事について』ということを知ったとする回答が最も多かったことと同様の傾向が認められた(図4)。

アンケート結果から、保護者の多くが子供に動物の命と食肉の関係を教えたり話しているにもかかわらず、子供側は、『自然に知った』としており、『肉を生産する動物について聞いた話』についても、食肉が動物の命であると明確に認識する回答が圧倒的に多い反面、『聞いたことがない』とする回答が多かったことは、保護者が話す食肉についての話が子供にはあまり記憶されていないことがうかがえた。そこで生徒が『肉が動物であることが分かった時期』と『肉が動物であることが分かった情報源』との関係について検討したところ、幼稚園の時期では『自然に知った』、『覚えていない』を除くと、『家庭』とする回答が多く、小学校入学以降においても『学校』よりも『家庭』で知ったとする回答が

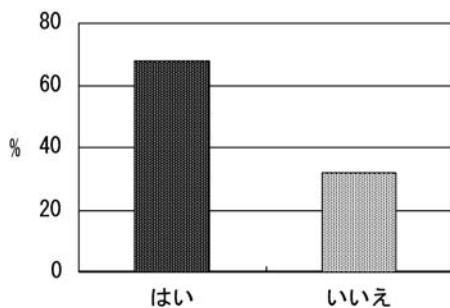


図1 家庭で子供に肉が動物であると話したり、教えたりしていますか

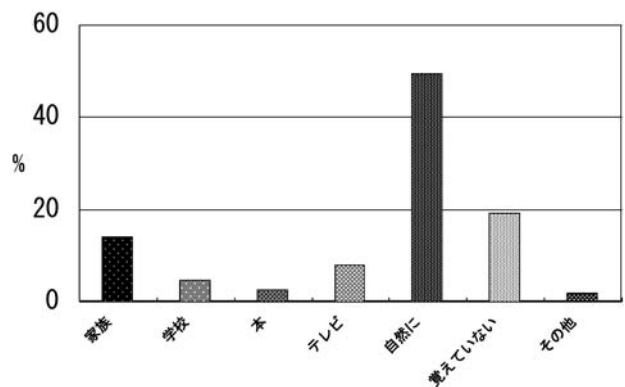


図3 肉が動物であることが分かった情報源

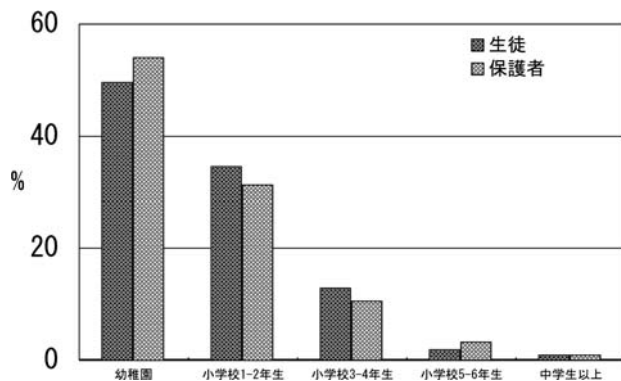


図2 肉が動物であることが分かった/教えた時期

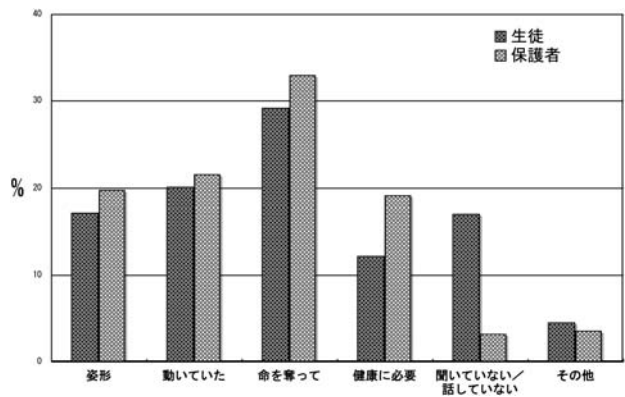


図4 肉を生産する動物について聞いた/話した内容

表 3 肉が動物であるを知った時期と情報源

時期	情報源	情報源 (%)							
		家族	学校	本	テレビ	自然に	覚えていない	その他	
時期	幼稚園	14.7	0	1.6	2.0	49.3	30.1	2.3	
	小学校1, 2年	15.7	5.1	2.8	7.9	42.6	25.9	0	
	小学校3, 4年	11.5	5.1	0	7.7	41.0	34.6	0	
	小学校5, 6年	8.3	0	0	0	50.0	41.7	0	
	中学校	0	0	0	0	0	100	0	

多いことが判明した。得られた回答では『肉が動物であるを知った情報源』を『自然に知った』、『覚えていない』とするものが多いものの、家庭では教育現場よりも、食材の買い出しとそれらを使用した料理を体験する機会に恵まれていることから、動物の命と食肉の関係を学ぶのには、家庭での教育が最適であることがうかがえた（表3）。

アンケート調査後に、調査者と子供、保護者の有志で動物の命と食肉に関する懇談会（調査者2人、中高生24人、保護者13人）を持ち、フリートーク形式で意見を集約したところ、動物の命と食肉の関係について頻繁には家庭で話をしていないこと、学校教育の中で話されるものなどの認識を持っているという意見等が提出された（表4）。

現在、命を大切にすることを養うため、学校教育の場で、肉用家畜を飼育して食肉としたり、食肉産業にたずさわる現場の人々を講師として、『命の教育』が行われている。これらの試みは、人間が他の生物の命を得て生かされていることを理解させるには一定の効果があると思われるが、今回のアンケートからは、家庭において日常生活の中で、食を通した『命の教育』が行われることこそ重要であることが読み取れると考えられる。

おわりに

今回のアンケート調査から、保護者が子供に対し小学校低学年までに、動物の命と食肉の関係を教えたり、話しているという実態が明らかになった。

しかしながら、教え話すことは子供が幼い時期にしか行われておらず、子供は、家庭で動物の命と食肉の関係を教えられた記憶を持ちにくいことがうかがえた。このことは、家庭で一度は動物の命と食肉の関係について保護者から子供に伝えてはいるが、一度話をするとは自明のこととして頻繁には話さないこと、学校教育の場では当該テーマについて必ずしも十分な時間が取れていないためだと思われる。我々人類は植物はもとより動物の命を享受して生かされているのであり、それを折りにふれ認識することは、食に対する感謝の心や他者を尊重する心を養うことに繋がるものと考えられる。今回のアンケートでは動物の命と食肉の関係を教えるのは、家庭が適しているとの結果が得られ

表 4 動物の命と食肉に関する懇談会における保護者の意見

1. 動物の命と食肉の関係についての話しは大切だ。
2. 親の話し方によって、子供が肉食を避けるようになると困るので、動物の命と食肉の関係について話す時期に迷う。
3. 『いただきます』の対象が何であるか、子供に認識させるきっかけになった。
4. 人間が他の生物の命をもらって生きていることを改めて認識した。
5. 動物の命と食肉の関係については、学校で教えていると思っていた。

たが、家庭においては保護者と子供が一緒になって食材の購入と料理を行う、学校においては動物飼育や食肉センターの紹介や見学等、たとえ子供が受けた教育の記憶を失いがちであったとしても、命の食育は、家庭のみならず学校など子供が食と接する環境のすべてで行われてこそ、教育効果があがるものと思われた。

謝辞: 本研究を実施するにあたり、本学附属中学校ならびに高等学校、都内の数校の中学校・高等学校の生徒ならびに保護者の方々に篤い御協力を頂きました。また担当の先生方にはアンケートの趣旨を御理解頂き、アンケート収集のための貴重なお時間を頂きました。すべての関係者の方々にこの場を借りて深謝いたします。

引用文献

- 1) 内閣府 (2005) 食育基本法 第1条-第15
- 2) 内閣府 (2008) 食育推進基本計画 第2 1-2
- 3) 関谷敏彦 (2007) 「いのちの大切さ」と「もったいないの心」を子供たちに知ってほしい 神奈川県畜産技術センターの食育への取り組み, 畜産の研究 61, 863-869
- 4) 合田之久 (2006) 家畜とのふれあいと畜産食育への取り組み 東京都, 畜産技術 613, 34-35
- 5) 苗川博史 (2003) 高校生の食肉動物の係わりに関する意識調査, 日本畜産学会大会講演要旨 101, 139
- 6) 鶴田一司, メイサー ダリル (2000) 日本における高校での生命倫理教育, ユウバイオス倫理研究会, 105-106
- 7) 多田納育子 (1992) 児童の生命観の発達に関する研究, 生物教育 32, 253-261
- 8) 加藤佳子, 瀬戸武司 (1996) 小学校における生命を尊重する態度の育成に関する基礎的研究, 生物教育 36, 2-11

Investigation into Home Training on The Relationship of Animal Life and Meat

By

Hidemi KADA*, Ayumi KOMATSU**, Kazuaki IWAMOTO***,
Maki HAYASHIDA* and Naoko AIBA****

(Received May 19, 2011/Accepted September 13, 2011)

Summary : In June, 2005, “Basic Act for Food Education” was established. However, regarding the content, importance was only put on the balance of a meals and the level of nourishment. the Meat, and animal protein represented by meat, extended the postwar average life span of the nation dramatically, but most of the food education programs teaching that meat is obtained by taking the life of the animal are not recognized.

Therefore, an investigation was carried out on home training in the relationship of animal life and meat, to recognize that a child receives the life of other animals, and to have a feeling of thankfulness for life.

A questionnaire survey of 2,126 people, 1,009 parents and 1,117 junior and senior high school students was carried out in Tokyo. It was ascertained that the students of elementary school lower class knew that meat was an animal. The students heard mostly that meat means taking the life of an animal, and the parents talked about this as well. It was found that the students did have the opportunity to understand the life of the animal and its relation to meat well, but there were many answers that showed that the students knew that meat was an animal naturally, but also that they did not remember it. It was understood that they found it hard to remember what they were taught at home.

Key words : food education, meat, life, home training

* Department of Bioproduction Technology, Junior Collage of Tokyo University of Agriculture

** Human and Animal-Plant Relationships, Graduate School of Agriculture ,Tokyo University of Agriculture

*** Department of Human and Animal-Plant Relationships, Tokyo University of Agriculture

**** Part-time teacher of Junior Collage of Tokyo University of Agriculture, Kitasato University Graduate School of Medical Science